



## 第8回

# 国友鉄砲ミュージアム

(滋賀県長浜市国友町 534)

鳥越一向一揆歴史館友の会／北陸城郭プロジェクト 塩谷忠士

友の会の世話人をしております塩谷です。今回は長浜市国友町にある国友鉄砲ミュージアムを紹介します。鳥越一向一揆歴史館の令和6年企画展「鉄砲と一向一揆 出土物は語る」に絡めて、友の会県外研修の訪問先のひとつとして同館を訪れました。国友鉄砲の歴史等の映像を見た後、館長に展示室を解説していただきました。

火縄銃は戦国時代に武士の戦い方を一変させた強力な武器であり、堺、紀伊の根来と並び国友は鉄砲量産地として知られていました。江戸時代に「石山合戦」の軍記物が流布し、雑賀(鈴木)孫一が石山本願寺(大坂本願寺)に助力して、織田信長の軍勢を鉄砲を使って大いに苦しめた話をご存じの方も多いのではないでしょうか。

火縄銃の伝来を伝える説のひとつは、天文12年(1543)種子島に漂着した明の船に乗っていたポルトガル人から領主・種子島時堯が2挺買い入れ、1挺を種子島の鍛冶師に複製させて国産化に初めて成功したというものです。もう1挺は、島津氏を通じて室町幕府将軍・足利義晴に献上されました。「国友鉄砲記」では管領・細川晴元を通じて、天文13年(1544)国友村の鍛冶職人・善兵衛らにその鉄砲の複製を命じたと伝えています。一方「国友鉄砲鍛冶由緒書」では、弘治2年(1556)に明の長子孔が種子島から京都に入り、その後国友に住まいして鉄砲製作を伝授したとしており、少なくとも1550年代には国友で鉄砲生産が行なわれていたようです。

同館には以前幾度か訪れたことがありましたが、今回館長のお話を聞いて思うことがいくつかありました。皆さんも展示された火縄銃を見て、きれいな状態だと思われたことはないでしょうか。ところがお話を聞くと使用感がないのは当然で、火縄銃は一度使用すると10年持たずに銃身(鉄筒部分)が腐食してしまうのだそうです。同館の展示室には、火縄銃が武器として需要が激減し美術品として製作していた江戸中期以降のものが展示されています。生産が始まった戦国時代の火縄銃が1挺もないのはとても残念ですが、そういう事情だったのかと納得しました。もうひとつは、火縄銃が幕末に西洋銃に席卷されたのは玉を前籠めしないといけない発射間隔の時間差ゆえですが、それ以外にも火縄銃は10発ほど撃つと銃身に火薬が溜まって撃てなくなり、尾栓ネジを外して掃除しないといけない構造なのだそうです。それではあの有名な設楽原の三段撃ちでも鉄砲ごと交換しない限り1挺では長時間撃ち続けることはできないため、一体1人あたり何挺持って戦場に行ったのだろうと考えてしまいました。



国友鉄砲ミュージアム

参考資料  
国友鉄砲ミュージアム配布資料



大展示室には貴重な火縄銃が展示されている



町内には鍛冶師等の屋敷跡の石柱が点在する